

神々たちの棲む漁港

一般社団法人水産土木建設技術センター
松江支所長 濱村 稔

1. はじめに



(図-1) 国引き神話の図

全国には神社あるいは寺院の門前町として共存繁栄してきた漁港が数多くあると思うが、当センター松江支所のある島根県出雲地方にも、漁業と神社が共存している漁港が数多く見受けられるので、この紙面をお借りして代表的な地区を紹介してみたい。

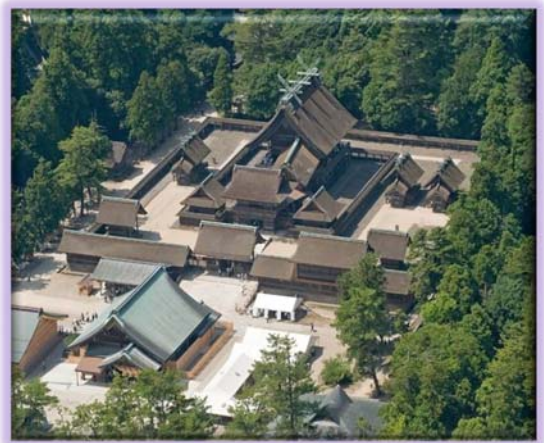
出雲大社がある島根半島は、「国引き神話」によると離れ島を、(図-1)のように二本の太い綱(東は伯耆大山を杭にして弓浜半島を綱に、西は三瓶山を杭にして稲佐の浜を綱に見立てる。)で引き寄せたことになっている。

「国引き神話」は、出雲国に伝わる神話の一つである。「古事記」や「日本書紀」には記載されておらず、「出雲国風土記」の冒頭に書かれている。

その当時、作られた出雲国は「八束水臣津野命」によれば、「狭布」すなわち東西に細長い布のようで失敗作であったという。そこで、八束水臣津野命は、遠く「新羅」「隠岐島前」「隠岐島後」「高志(越)」の余った土地を裂き、四度、「三身の綱」で「^{くにこ}国来、^{くにこ}国来」と掛け声を掛けながら「国」を引き寄せて「狭布の国」に縫い合わせ、そして、できた土地が現在の島根半島であるという。国を引いた綱はそれぞれ「^{いなさきの}稲佐の浜」と「^{きゅうひん}弓浜半島」になったという神話である。これは、今から1万

年位前には離れ島であった島根半島が、河川からの流出土砂により陸続きになった事実を神話化して後世に伝承した壮大な話であり古代の浪漫に圧倒される。この、島根半島東端の岬に「美保神社」が鎮座する第2種美保関漁港、西端の岬には「日御碕神社」が鎮座する第2種宇竜漁港、そして両神社の中間西端寄りに第3種大社漁港を有する「出雲大社」が鎮座している。

2. 出雲大社



(写真-1) 出雲大社上空写真

暦で10月は「神無月」となっているが、当センター松江支所が立地している出雲地方では、旧暦の10月を「神在月」と呼んでいる。

この時期になると、全国から八百万の神々が「出雲大社」に集まり、本殿周囲の「九十九社」に長期宿泊して新しい年の方針協議をするため、全国各地の神々は留守となるが、出雲地方は八百万の神々で溢れている。特に、「出雲大社」は縁結びの神社として有名であり、平成25年5月には60年に一度という大遷宮祭が執り行われ、翌平成26年10月には千家宮司長男である権宮司国麿氏が高円宮家長女典子女王とご結婚されるという慶事もあり、全国各地から良縁を求め参拝客が訪れ

ている。因みに、八百万の神々は全国各地から海路を利用し大社漁港「稲佐の浜」海岸から龍蛇神を先導役として上陸され、深夜この浜で執り行われる「神迎祭」とともに「出雲大社」までの「神迎の道」を延々と行列が続いて行く。

3. 美保神社



(写真-2) 美保神社

神様である「恵比須神」といわれ、福神として信仰されるにつれて、「美保神社」は恵比須さんの本宮と言われるようになっていく。この美保関は、観光地としても有名で「関の五本松」は民謡にも歌われ、「安来節」とともに我が国の代表的な民謡としてよく知られている。



(写真-3) 諸手船神事

島根半島東端の岬には、全国3,385社の「えびす社」の総本宮として名高い「事代主神」を祀る「美保神社」が鎮座している。この、神社は、天平5年(733年)編纂の「出雲国風土記」及び延長5年(927年)成立の「延喜式」に記されている古社で、現在の本殿は文化10年(1813年)造営で国の重要文化財である。

「美保造」または「比翼大社造」と呼ばれる特殊な造りで、ご祭神は、「事代主神」と「三穂津姫命(大国主命の夫人)」である。「事代主神」は、「大国主神」の第一の御子神で鯛を手にする福德円満の「えびす様」として世に知られ、海上安全、大漁満足、商売繁盛、歌舞音曲、学業の守護神として篤く信仰されている。この「美保神社」すぐ前面が第2種美保関漁港であり、この漁港の泊地において「美保神社」の代表的な神事である国譲りをモチーフにした「諸手船神事(12月1日~3日)」(写真-3)及び「青柴垣神事(4月7日)」が執り行われている。「事代主神」は、中世に入って「えびす信仰」と習合して漁業、海運、商売の

4. 日御碕神社



(写真-4) 日御碕神社

島根半島西端の第2種宇竜漁港に鎮座している神社が「日御碕神社」である。この地は、日本海に沈む壮大な夕日を眺める絶好の場所であり、古代から神祕で聖なる所と見なされてきたに違いない。「出雲国風土記」に「美佐伎社」と記されているのが「日御碕神社」の前身だろうと考えられている。風土記にでてくる神社で、「日御碕神社」の

ように「大社造」ではなく彩色の「権現造」というのは他に例がない。そこには恐らく何か深い訳があるのだろう。ここの、朱楼門をくぐると、正面に「日沈宮（下の宮）」、右手小高い所は「神の宮（上の宮）」が鎮座する。「日沈宮」のご祭神は「天照大神」、神の宮のご祭神は「須佐之男命」が祀られている。いずれも平入りの本殿が唐破風向拝付きの拝殿と続いた権現造であり、桃山時代の貴重な建築様式を残すものとして、14棟一括重要文化財に指定されている。両本殿とも、内壁や天井には、狩野派、土佐派の絵師たちが腕を競い合った華麗な壁画が描かれている。社伝によると、「神の宮」は後方の「隠が丘」から移したものであり、「日沈宮」は「ウミネコ」の繁殖地として、国の天然記念物「経島ウミネコ繁殖地」に指定されている漁港沖約100mにある「経島」（写真-5）から移したものらしい。「経島」は、面積約3,000㎡の無人島で、日御碕神社の「下の宮」があり、神職以外の上陸は禁じられている。当漁港は、美保関漁港と同様に「大山隠岐国立公園」に位置し、周辺一帯は大小さまざまな島々や湾、砂浜が見られる隆起性の複雑な海岸地形をなした景勝地となっており、隣接の「海中公園」はグラスボートによる海中展望で観光客の目を楽しませている。また、漁港区域内岬突端には、灯塔の高さが日本一を誇る「碕」の字が付く唯一の大型の石造洋式灯台である日御碕灯台（写真-6）がある。世界灯台100選や日本の灯台50選に選ばれた日本を代表する灯台で、歴史的、文化財的価値が高いため保存灯台となっている。全国に5箇所しかない最大の第1等レンズを使用した灯台でもある。

5. おわりに

島根半島外海側には、「漁港漁場整備法」における26港の指定漁港と「港湾法」指定の17港がある。分港等も数えると約50地区を超える漁業集落が点在し、島根半島東西約100kmの海

岸線に平均約2km間隔に漁業集落が形成され県内では漁業集落密集地域である。その全ての集落に神社が鎮座し、「海運・航海・海上安全」、「豊漁・大漁祈願」、「漁業守護・漁業満得」等を御神徳とした古代からの主祭神達の神々が漁業を中心とした生活のなかで、これからも地域の皆さんと一緒に未来永劫棲み続け漁業集落の安泰と繁栄を約束してくれると信じ筆を置きます。



（写真-5）経島



（写真-6）日御碕灯台

〔参考文献〕

1. 島根県神社庁公式ホームページ
2. 島根県公式ホームページ